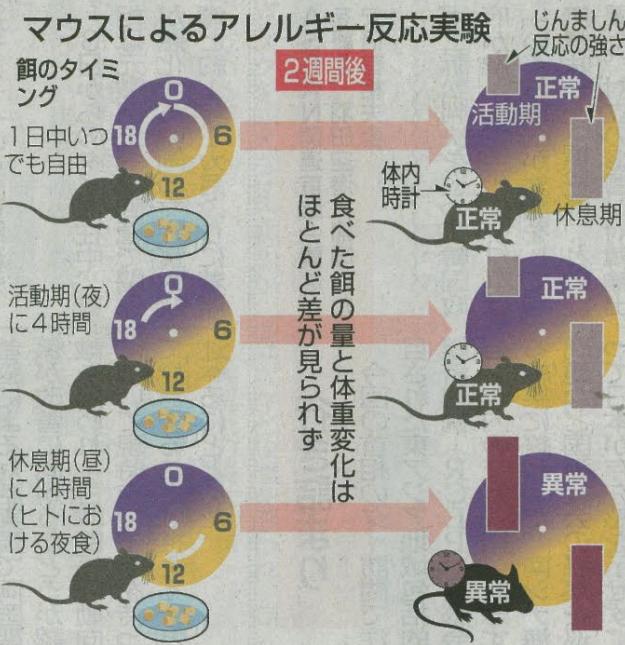


不規則な食事でアレルギー悪化

山梨大マウス実験

治療・予防へ応用期待



中尾教授らはじんましん疾患(アレルギー)を持つ夜行性のマウスを用いて実験。餌を与えるタイミングを①24時間与える②活動期(夜間)の4時間だけ与える③休息期(日中)の4時間だけ与えるの各グループに分け、アレルギー反応の出方を比較した。

山梨大医学部の中尾篤人教授(アレルギー学)らは、不規則な時間に食事を取ること、花粉症などアレルギー疾患の重症化などにつながる、とする研究結果をまとめた。不規則な食事は体内時計のリズムを狂わせ、アレルギー反応の強さや症状が出やすい時間帯に悪影響を及ぼすと分析。これまでは投薬療法が中心のアレルギー疾患対策で、中尾教授は食事を取る時間帯の指導による治療・予防法の確立につながるとみている。

〈土屋圭佑〉



中尾篤人教授

2週間後、休息期に餌を与えた組では、休息期と活動期ともに強いアレルギー反応があった。一方、24時間餌を与えた組と活動期に与えた組は、アレルギー反応が休息期に強くなり、活動期に弱くなる結果だった。

中尾教授らはこれまでの研究で、体内時計はアレルギー反応が昼に弱く、夜に強くなる

ただ与えるの各グループに分け、アレルギー反応の出方を比較した。

山梨日日新聞
2019年11月6日(水) 1面

るよう制御していることを突き止めている。体内時計は不眠やストレス、食事の時間によって影響を受けるとされている。今回の研究は食事の時間とアレルギー反応の関係に着目して実施し、マウスでは関連が有意にあることを証明した。

人の体でも食事の時間とアレルギー反応に関連があるかを解析する研究を計画。アレルギー症状の改善に向けて従来は投薬療法が主だったが、今回の研究により「食事の時間を変えるだけで症状の改善につながる可能性がある」と中尾教授(中尾篤人)という。

「患者の食生活を変えることで症状の改善や治療薬の減量、発作の予防につながる。診療面で大きな進歩が期待できる」と話している。